

坪田譲治 作品の舞台--譲治生家

著者	山根 知子
雑誌名	清心語文
号	12
ページ	1-11
発行年	2010-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000295/

坪田讓治 作品の舞台

——讓治生家——

坪田讓治の作品には、生まれ育った故郷岡山が舞台になっている小説・童話が多い。このことについては讓治自身、早稲田大学時代のキリスト教系寄宿舎友愛学舎にて一分ほどの祈りの時間に「母や兄のいる、郷里の家、友だちのいる村の景色、そんなものを毎日、毎日頭の中に描きました」という生活を五年ばかり続けたことで、作品の舞台が次ようになってきたと述べている。

三十年ばかりたった時（＝大学時代以来約三十年を経た五十歳頃・引用者注）、やっと童話や小説を書いて、生活していけるようになりました。その時、自分で、気がついてみたら、私は、どの小説でも、どの童話でも、その舞台、その作品の中の場面は、みんな私の故郷になっていました。私の生まれた村になっていました。それも、私が二十のころの村になっていました。しかもそれが、今見た

山根 知子

ばかりのように鮮やかに映し出されていました。

（「一日一分」『びわの実学校』第6号 昭和三十九年九月）

讓治のこのような記述からも、讓治の作品の舞台の多くは、故郷岡山の「私の生まれた村」すなわち讓治が生まれた岡山県御野郡石井村にあった島田という村（現・岡山市島田本町）であると認識されていたといえる。しかも、この舞台については、作品によって明らかに記述されているものもあれば、確定的な表現はなくても島田の村がイメージされていることが推測されるものもある。それゆえに、島田の村をめぐる作品の舞台について研究を深めることは、讓治作品の理解のために不可欠であると言っても過言ではあるまい。

ところが、すでに讓治生誕一二〇年を迎える今日に至っては、讓治が幼少年期から青年期までの島田村の様相は大きく変

わりはて、語り伝える人や資料などの手掛かりにおいても少なくなっている。こうしたなかで譲治作品理解のための未だ着手されていない基礎研究は急務であり、作品と風土との関係についての研究もその一つであるといえる。

そこで譲治の作品の舞台として、まず島田の村全体に関する調査および譲治幼少期の島田村を再現した地図作製については、二〇〇三年に発表した^(注1)。この島田は、二十件あまりの家が集まった村であり、その中央には坪田家本家があり、その分家にあたる譲治生家は、本家からは約五十メートル南にあり、「前新家」と呼ばれている。

この生家は、譲治の兄である長男坪田醇一の直系によって継がれたが、昭和六十二年に取り壊されたことによって詳細は不明となった。

本稿では、この譲治生家について、譲治執筆の文章によって生家をめぐる事実および譲治の思いを考察し、今回さらに、この生家に住んでいた「前新家」の跡継ぎである坪田醇氏の証言を得ることができたことから、聞き取り調査の成果として作製することのできた「間取り図」を後掲したい。加えて、この「間取り図」をもとに、生家の外観模型を作製することができた。この模型については、写真を掲載する。

まず、譲治作品によって、譲治生家について記述されたと考えられる描写を挙げて、譲治生家の状況および譲治の記憶として残されている印象について確認をしたい。

なお、引用は主として新潮社版『坪田譲治全集』十二巻によった。その場合、〈 〉内の数字は、その巻数を示すこととする。また、全集未収録の作品については、出典を付記した。

さらに考慮すべき点として、生家についての考察内容については、譲治の文章によって記された多くの情報が譲治の幼少期における生家の状況であり、譲治の思い入れとしては幼少期の記憶が重視されているという点があるほか、他の年代における状況も記述されている点もあることから、対象となる時期についての注意が必要となろう。なお、後掲した「間取り図」は、譲治が生家に住んでいた最後の時期である昭和八年当期（譲治四十三歳）の状況として再現しているために、譲治幼少期とは若干の差異が認められることを断っておきたい。

門・台所

・門の格子戸をあけると、わたしはおかあさんをよびました。「おかあさん。」

そして、そのまま、そこに、その敷石の上にたおれまして。氣を失ったのです。

おかあさんは台所にいましたが、一声だけでも、なにかわったわたしの声を耳にして、門のほうにかけだしてきまして。(10)「病氣の話」

▼讓治が小学生時代に病氣で早引きをして一人で帰宅した思い出において、門の敷石が描写されており、またその門で讓治の叫んだ声が、台所にいた母親に聞こえたという事実よりその距離感がわかる。

玄関

・わたしの生まれた家の玄関は、わりあい広い土間になっていました。それは、六畳の間ぐらいいはあったでしょう。したがって、その戸口も、四尺か五尺ありました。わたしの子どものころ、そこへは、いろいろな物売りがやってきました。(10)「大がかあの話」

▼ここでは玄関の土間の広さについて具体的に明記されており、この広さは古写真や間取り図での確認においても正確な表現であることがわかった。讓治の印象においては、「大がかあ」という「ぞうり売り」のほか、同作品では「こむ僧」、続

く「墓守りのおていさん」(10)「ねずみのいびき」)では坪田家の墓の管理を依頼している「おていさん」が登場し、いずれの描写においてもこの玄関という空間は、讓治の母親が様々な人生の重荷を負う他者との情け深い交流をした場として捉えられているといえる。

茶の間

・「あの橋(エヘンの橋・引用者注)から、うちのこの茶の間まで歩いて何分かかかるだろうね。一分か、二分。そのあいだの御飯の用意だから、おぜんを出す間もなかった。」

(10)「エヘンの橋」

▼讓治の父(讓治が八歳のとき病没)の思い出を母がたびたび語ったという内容で、父が帰宅の際、家の北東の石橋に来たら「エヘン」と咳払いするから食事の用意をするようにと言ったという挿話から讓治がその石橋を「エヘンの橋」と命名した話。この「茶の間」とは、間取り図の台所脇にある「食事の間」を指すかと思われるが、エヘンの橋から門と玄関を経由して到着する時間としては、確かに「一分か、二分」という距離であると考えられる。

縁側

・ そのころになって、子どもたちは、たけの棒をさげたり、小石を三つも四つもふところに入れたりして、その、ほくの家の縁側の前にあつまりました。(「10」 「レグホンの最期」)

▼母屋の南側で、庭に面した広い縁側である。この縁側の前は、子どもたちが集まる場でもあったことがわかる。

二階の間

・ 家の奥には六畳の二階あり。二階よりは遠くの町、または山などを見ることが得。洪水の時は村の人々多くそこに集まりしと、母上吾等に告げられたり。村にて唯だ一つの二階なり。(「2」 「家」)

・ 三人は二階に上って、原っぱに向いて窓を開けた。

(「1」 「雪という字」)

▼「雪という字」は、昭和三年十二月二十二日『東京朝日新聞』に掲載され、のちの全集においても短編小説として扱われていることから、作品中の間取りは必ずしも譲治生家によるとは断定し難いが、東京の住まいは昭和三年時点では未だ平屋であったことから(昭和十三年に改築して二階ができる)、当時

の譲治にとって、二階のイメージには生家の記憶が反映していると考えられる。

便所

・ 「お便所へ行ったら、金山の方を見てごらん。山の灯が見えたら、明日は天気です」(「故里のともしび」 『故里のともしび』昭和二十五年十一月 泰光堂)

▼遠足の前の夜など母親に天気を聞いた返事としての言葉。島田から遠く北に仰ぐ金山山頂の金山寺の灯が天気予報代わりにもされ、眺められていたということから、これは敷地の北東隅にあった便所からの眺めであると考えられる。

・ 私の生家は、私が幼い頃、便所が外にあったのです。昔のイナカの家は大抵そうになっていたようですが、奥の間から雨戸を一枚あけて、二間ばかりの吹きさらしの廊下を伝って、行くのです。(「5」 「戸締り合戦」)

▼この描写中の便所とは、「奥の間から雨戸を一枚あけて」行くという表現から、敷地の西側にある二つのいずれかであると考えられる。また、譲治幼少期には渡り廊下が「吹きさらし」であったことがわかる。

土蔵・くすのき・母屋

・ 家のうしろにある古い大きなくすのきのしげみ、その前にある白かべの土蔵、そしてその土蔵の前の、大きなわらぶき屋根。(〈10〉「『かっぱとドンコツ』あとがき」)

・ ふくろうという鳥は、夜鳴く鳥ですが、そして四月ごろ鳴くように、わたしは思っていました、それがどうしたことか、わたしの小さいころ、わたしの家のくすのきにきて、この十二月、きまって鳴くのでした。(〈10〉「子ども十二月(月)」)

▼「くすのき」と「白かべの土蔵」、そして、譲治の幼少期には「わらぶき屋根」であった母屋が、譲治にとって生家の印象の中核になっているといえる。このなかで現在も「くすのき」のみ存在する。また、「くすのき」は「白かべの土蔵」に隣接していたため、現在のくすのきの南側の根元には、土蔵の敷石の跡型がラインとなつて残っているのが見られる。このくすのきは、岡山市の保存樹とされ、その木の下に「坪田譲治先生生家跡」の石碑が建っている。

・ エンピツもカンヅメもセメントもいまはもうやっていません。しっばいしたのです。しかしそのおかげで、土蔵のすみに、いまでも、つくりかけのエンピツが、三百本も五百本

も、たばにして、つみあげてありました。(〈9〉「武南倉造」)

▼譲治の父親はランプ芯工場を創業して成功したが、ランプ芯製造に落ち着くまでの時代に、父が様々な挑戦をしていた頃、試作として鉛筆などが製造されたとして、土蔵の「つくりかけの鉛筆」が作品にしばしば登場している。

納屋

・ うちでは、しかし家の中にはいれませんか、納屋の前にいつてみました。納屋の戸をあけると、わらむしろがありました。それを出して、そのうえにしりをすえ、ぼんやりしていました。(〈10〉「おとうさんの話」)

・ そういつて、左の方の納屋に友さんを案内しました。

そこは、わたしの生まれない前、うちが百姓をしていたころの納屋で、いまでもわらがつんでありました。おじいさんが百姓ずきで、道楽に一反ほどの田んぼをつくっていたのです。そのわらを二、三たば上からおろして、すみのほうに、とりの巣をつくりました。(〈10〉「レグホンの最期」)

▼納屋は、門の左右に位置し、納屋のなかには、昔やっていた農業の名残りとしてのわらや道具が残っていたという。

庭

・ その母屋の座敷の前には広い庭があつて、庭には築山があり、築山には燈籠が立っている。その築山と座敷の間には瓢箪形の細長い池があつて、池の中には緋鯉や真鯉が泳いでいる。池にはまた石の反橋がかかつていて、その橋の一方のたもとにはあやめ、やかきつばたが植っている。（〈2〉「求むるころ」）

・ ところで、祖父はどんなにして、私に自然を見せてくれたろう。彼は庭作りが好きで、毎日毎日私のうちの庭をいじつていた。ああでもない、こうでもない、自分で石を動かしたり、松の木を植えかえたり。それを私は毎日眺めつづけ、自然に布置結構というようなものがあることをいつとなく教えられたように思う。

▼この祖父は、父方の祖父で同居してした坪田平作である。この描写では、祖父の庭づくりが、自然の創造主の営みとも重ねて捉えられていることがわかる。

エヘンの橋

・ 私の生家には、その橋を渡らないと、入ることの出来ない

点、まるで、自家用の橋です。だから、まるで、家の一部のように、とても、沢山の、そして懐しい思出があります。

（〈6〉「橋」）

・ そこでまず、わたしが生まれた家の北東のかどにある橋の話をしてしよう。

それは横幅が二メートル、縦の長さが三メートル。いや、もっと小さかったかもしれません。みかげ石できています。わたしが生まれる前からそこにかかつていたのですから、百さい二百さい、あるいは、もっと年をとっているのかもしれない。（〈10〉「エヘンの橋」）

▼譲治にとって生家の「家の一部」のように捉えられていた橋。現存し、譲治命名の「エヘンの橋」として案内板も添えられている。敷地脇の川には、護岸のための石垣（生家側）も残っている。

〔付記―調査・作製過程の記録〕

の形が完成した。

一、間取り図調査

坪田譲治の生家は、現存しないうえに間取り図も存在せず、生家の風景を伝える譲治自身の記述と古写真によつて知られるのみで、詳細は不明であつた。そのようななかで、坪田譲治研究会（代表山根知子）の一員である大塚利昭氏（岡山市職員）の紹介により、生家取り壊しまでこの家を継いで管理をしていた譲治の兄坪田醇一の孫にあたる坪田醇氏に出会うことができた。そこで、坪田醇氏に生家研究への協力について快諾いただき、二〇〇九年六月より、まず間取り図作製のための聞き取り調査を始めることが可能となつた。また、その後十回以上にわたる調査の立ち会いや記録等において、同じく坪田譲治研究会の一員である山本和雄氏（岡山後楽館高等学校教諭）の協力を得た。

このようななかで、間取り図については、譲治テキストと坪田醇氏の詳細な証言、さらに生家の古写真とに忠実であるようにとの正確さをめざして筆者が作製した。作図作業においては本学日本文学科卒業生井上万梨恵の協力を得て本稿掲載

生家 間取り図



二、復元模型作製

坪田譲治は二〇一〇年三月三日に生誕一二〇年を迎え、本学での坪田譲治コレクションの公開展示を含め、三月十三日に記念行事を行う予定であったことから、復元模型を作製し、その展示の場で間取り図とともに公開をめざすこととした。そこで、復元模型作製については、先の坪田譲治研究会の山本和雄氏の紹介によって、岡山工業高等学校への共同研究の依頼が受諾され、同校建築科教諭三好幸雄氏を中心とする教諭・生徒のチームに進めていただく段取りとなった。この模型製作過程においても、坪田醇氏による確認を随時いただいた。

こうして模型は、二〇一〇年二月末には完成し（「山陽新聞」二月二十二日掲載）、本学へ運ばれ、三月九日から十二日までの学内展示および十三日の一般公開展示にて初公開された。また、引き続き三月十七日から二十二日まで、岡山市デジタルミュージアムの坪田譲治展にて展示された。

なお、展示の際のキャプションは、以下の通りである。

坪田譲治生家模型（100分の1）

譲治の生家（約1100㎡）。島田の村の中央に位置する本家から、譲治の母幸（こう）の結婚・分家に際して建てられた家で、「前新家（まえじんや）」と呼ばれる。昭和六十二年に取り壊された。この模型は、譲治が最後に住んでいた昭和八年頃の間取り図を、前新家の後継ぎである坪田醇氏の証言によって記録し、模型に再現したものである。

間取り図作製および模型監修

ノートルダム清心女子大学教授 山根知子

模型作製：岡山県立岡山工業高等学校

教諭 三好幸雄 河原英利

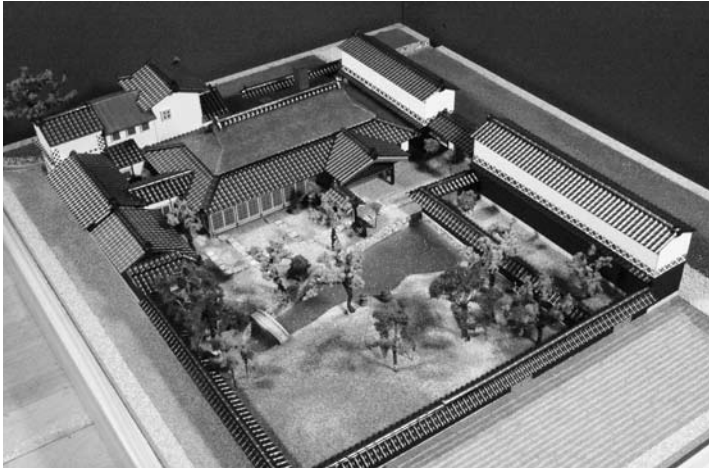
生徒 窪田大祐 横山大将

竹山紀子 平田美加 守田和美

協力：坪田譲治研究会 山本和雄

（山根知子研究室蔵）

讓治生家 復元模型



注1 拙論「坪田讓治 作品の舞台―島田―」（『ノートルダム清心女子大学紀要』日本語・日本文学編 第二十七巻第一号 二〇〇三年三月）

※ 今回の調査研究にあたっては、坪田讓治の三男坪田理基男氏のご理解をいただき、前新家の後継ぎである坪田醇一氏の貴重な証言をはじめ多大なご協力を賜ったことを感謝申し上げます。

（やまね ともこ／本学教授）